

## 業界初、「コロナ治療処方薬対象」の保険登場…安心を得る手段として根付くか

1/30(木) ニュースイッチ



新型コロナウイルス感染症に再流行の兆しがある中、住友生命保険グループ子会社のアイアル少額短期保険（東京都中央区）やPayPay 保険サービス（同千代田区）などは28日、コロナで医療機関を受診し、抗ウイルス薬を処方された場合に見舞金を支払う保険を発売した。かつて登場した「コロナ保険」は、コロナの診断に伴い見舞金を支払っていたが、今回は治療薬の処方が保障対象となる。住友生命保険によると、治療薬に対し保険金を支払う点で業界初という。

PayPay 保険サービスなどが開発した「コロナ治療薬お見舞い金」は保険料が月100円の場合、1万5000円の見舞金を支払う。ゾコーバやパキロビッドなどのコロナの抗ウイルス薬は、3割負担で1万5000

円超と高額になり、治療をためらう人が少なくない。そこでゾコーバを手がける塩野義製薬が保険料の一部を負担し、消費者の負担を抑えたという。

コロナ関連の保険をめぐっては、かつて保険各社がコロナと診断されたり、入院したりすると保険金が受け取れる商品を発売し、売れ筋となった。PayPay 保険サービスも扱っていたが、患者数が爆発的に増えたことで採算が合わなくなり、売り止めになった過去がある。足元のコロナの感染者数は年末年始の連休で人の移動が多かったことも影響し、増加傾向にある。厚生労働省によると、1医療機関当たりの平均患者数は、1月13日から19日の週で5.62人と、11月の1—2人程度に比べ2倍以上に増えている。コロナを季節性インフルエンザと同等に扱う「5類」移行後も、何度か流行の兆しは見えていた。

新しい保険は感染済みの患者の加入を防ぐため、申込日から14日後に保障が始まる。将来の感染に備えて、安心を得る手段として保険が根付くのか。業界が関心を寄せている。新商品の売れ行きは、人々が今もコロナをどれほど脅威に感じているかを知る試金石にもなりそうだ